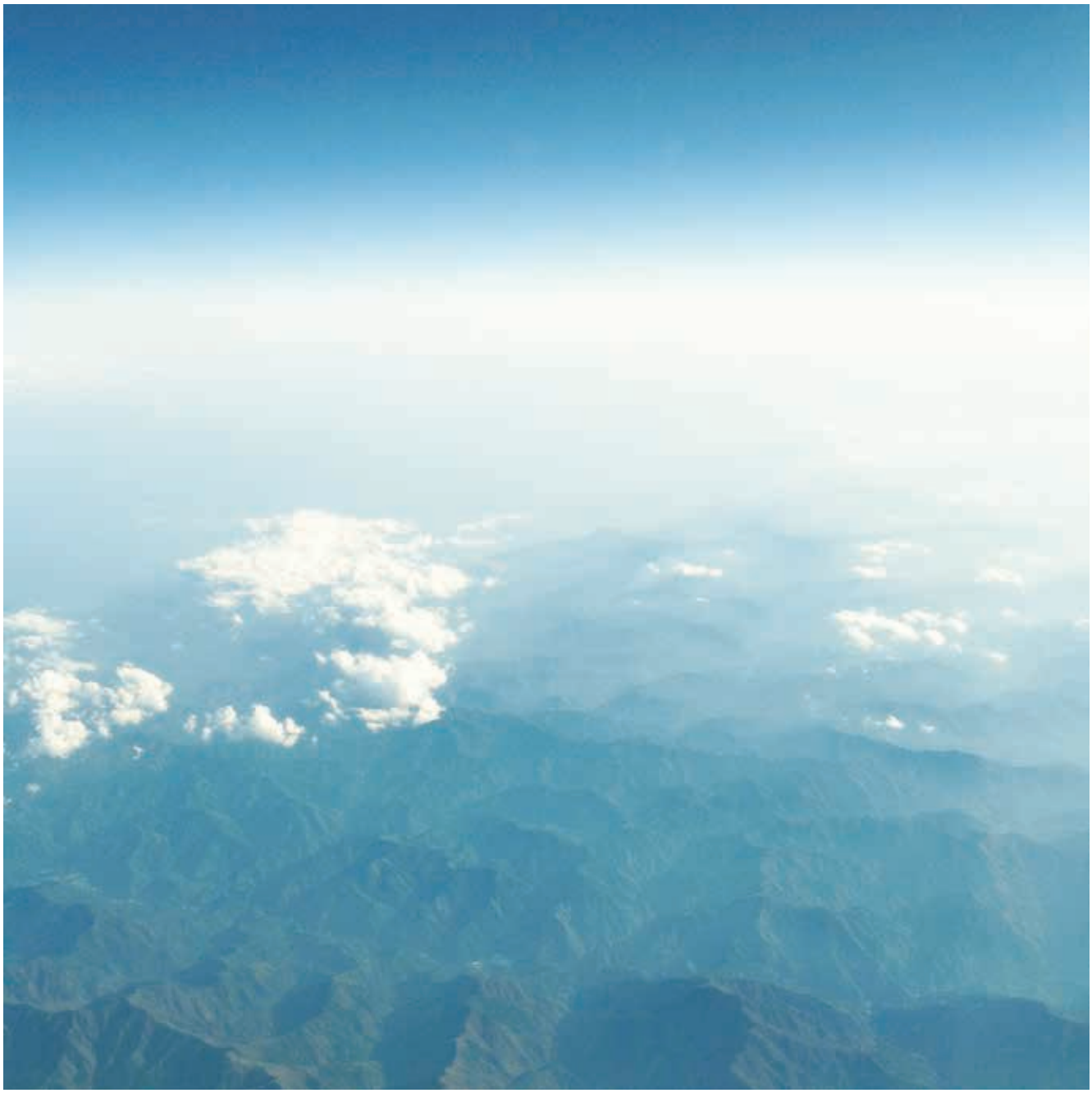
Asian Journal of

HUMAN SERVICES

Printed 2012.1030 ISSN2186-3350
Published by Asian Society of Human Services

October 2012
VOL. 3



Asian Society of Human Services

Human Services

Asian Journal of Human Services , VOL.3 208-218

SHORT PAPER

院内学級担当教師と他職種との連携に関する現状と今後の在り方に関する文献的考察

Bibliographical consideration about the current situation and the problem to be solved about cooperation between teachers in hospital classrooms and other staffs.

角谷　麗美 1)　(Remi KAKUTANI)，　森　浩平 2)　(Kohei MORI)
小原　愛子 2)　(Aiko KOHARA)，　田中　敦士 3)　(Atsushi TANAKA)

1)　琉球大学　教育学部
〒903-0213　沖縄県中頭郡西原町千原1　琉球大学教育学部特別支援教育講座
ichariba-nankuru@rc4.so-net.ne.jp
2)　琉球大学大学院　教育学研究科
3)　琉球大学　教育学部

ABSTRACT

近年、入院している子どもの多くは院内学級で教育を受けることができる。これは彼らの学力を維持し続けることだけでなく、心理的安定にもつながる。本研究では、医療関係者や教師間の連携について文献研究を行った。医療関係者に関するほとんどの事例では、院内学級の子どもたちを支援するために医療関係者が非常に重要な役割を果たしていた。教師と医療関係者はそれぞれの職種を理解し日常的に交流を図りながら連携する必要がある。

These days, most hospitalized children can continue to get their education in hospital classrooms. This is not only so they can keep up with their studies, but also to contribute to their mental well-being. In this research on hospital classrooms, we analyzed the interaction between medical staffs, teachers and so on. In most cases regarding medical staff, we found that medical staff playing an important role in helping the children in the hospital classrooms. Teachers and medical staff need to cooperate by understanding their coworker's job description and communicating regularly.

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

＜Key-words＞
入院治療中の子ども達，院内学級，教員

hospitalized children，hospital classrooms，teacher
Asian J Human Services, 2012, 3:208-218. © 2012 Asian Society of Human Services

Ⅰ. 問題と目的

病弱教育とは、さまざまな病気を原因とした生活・行動上の困難（健康障害）を抱える病弱児を対象とし、その子ども達へ行う教育的支援のことをいう(村上，2004)。学校教育法施行令第 22 条第 3 項では病弱教育対象児の障害の程度について「１．慢性の呼吸器疾患、腎臓疾患および神経疾患、悪性新生物その他の疾患の状態が継続して医療又は生活規制を必要とする程度のもの　２．身体虚弱の状態が継続して生活規制を必要とする程度のもの」と定義している。

病弱・身体虚弱児は入院・治療等による学習空白から学習に遅れが生じたり、回復後においては学業不振を示したりすることが多い。「病気療養児の教育について（通知）」(文部科学省，1994)によると、病弱教育はこのような学習の遅れなどを補完し、学力を補償する上で重要な意義を有することはいうまでもないが、その他、(1) 積極性・自主性・社会性の涵養 (2) 心理的安定への寄与（3）病気に対する自己管理能力の育成（4）治療上の効果等の意義も挙げられる。これらは意義であると同時に、病弱教育のねらいでもある。

病弱教育を行う場として、病弱特別支援学校の場合は、隣接・併設していない病院等に入院している子どもたちのために分教室を設置したり、分教室が設置されていない又は自宅や施設で療養中に通学して教育を受けることが困難な子ども達に対して教員を派遣して訪問による指導を行ったりする。入院を必要としながらも特別支援学校に在籍せずに小学校や中学校等で学ぶ障害や病気のある子どもについては、学校教育法第 81 条第 2 項（文部科学省，2011a）で、「小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校は特別支援学級において教育を行うことが適当とされた者に対して特別支援学級を設置することができる」と明記されている。そして、学校教育法第 81 条第 3 項（文部科学省，2011b）には「前項に掲げる学校は、疾病により療養中の児童及び生徒に対して、特別支援学級を設け、または教員を派遣して、教育を行うことができる」と明記されており、院内学級やベッドサイド学習にあたる形で授業を行っている。これらのことを踏まえ本研究では、病院内に設置されている学級を総称して「院内学級」とする。

病院内での教育活動において、他職種との連携は非常に重要な要素である。病弱教育における教育補償の課題に関して、中村・真城（2001）は「就学に関する課題」「学籍に関する課題」「教育環境に関する課題」「学校における医療行為に関する課題」「家庭の生活基盤に関する課題」の 5 点を挙げている。これらはいずれも教育だけでなく医療あるいは家庭に関する問題が絡まっており、教育の分野だけで解決することが困難である。そしてその解決のためには医療・教育・家庭の相互の協力が不可欠であろう。

そこで本研究では、国立情報学研究所論文情報ナビゲータ(CiNii)で連携に関する文献を抽出し文献研究を行い、病院の中の教師の役割や医療との連携の在り方について考察することを目的とする。

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

Ⅱ. 方法

１．分析対象

国立情報学研究所情報論文情報ナビゲータが提供している文献からそれぞれ「院内学級連携」「病弱教育　連携」のキーワードで抽出した 29 件のうち、連携事例が述べられている文献 17 件すべてを本研究の対象とした。

２．分析方法

対象となった文献の中から連携について「院内学級」を主体とし、連携相手・連携内容を分析した。

Ⅲ. 結果

１．連携相手

院内学級と連携を図っている事例を相手別にみると、図 1 の通りとなった。「院内学級」と「医療関係者」との連携に関する事例は 24 事例で、最多であった。

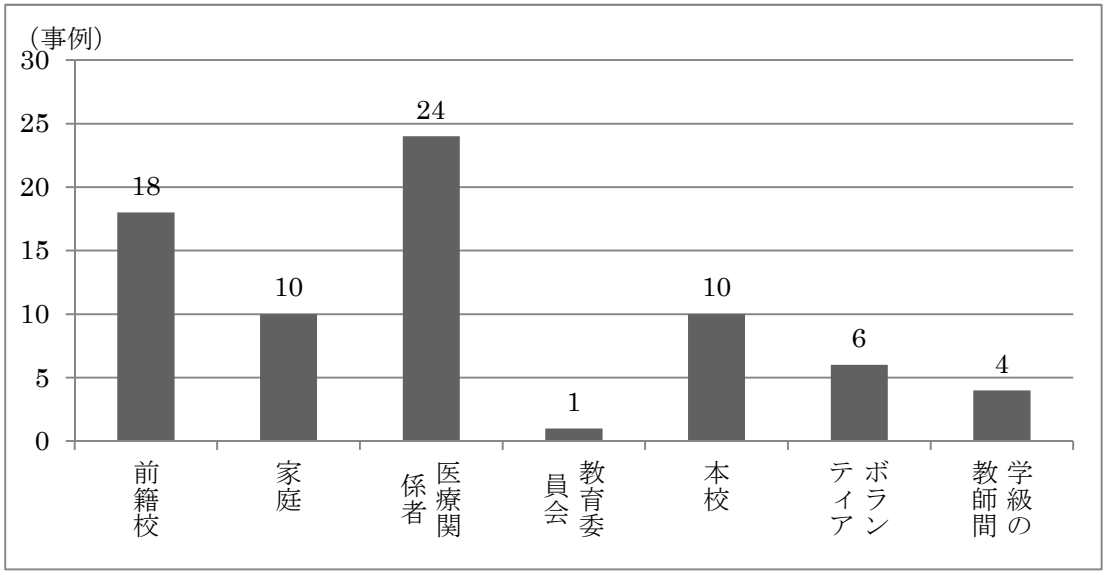


図１　院内学級の連携相手

２．院内学級担当教師と各職種との連携事例

院内学級担当教師と各職種との連携事例を項目別に表 1 から表 7 に示した。

（１）前籍校

院内学級担当教師と前籍校との連携事例を分析したところ、「子どもの情報交換」「前籍校と繋がりを保つ工夫」「子ども同士の交流」「復学支援」「ターミナル・ケア」に分類することが出来た（表 1)。院内学級担当教師が前籍校の担任と連絡を取り合うことによって初めて子

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

ども同士の交流が実現している事例が多く、子どもが前籍校とつながっているという思いをもつことができるようにするためにも、前籍校との連携が重要であることが明らかになった。

表１　前籍校との連携事例

子どもの情報交換
・電話や書類での子どもの状況報告（山内ら，2009）。
・学習進度や習得状況等についての把握（石井，2008）。
・児童生徒の学習状況をふまえ、前籍校との連絡を密にして指導する（萩庭，1996）。
・前籍校との必要に応じた話し合い（清水ら，2000）。
繋がりを保つ工夫
・前籍校の教室での席の確保（高宮ら，2005）。
・前籍校から借りた机、椅子を授業中に使用（高宮ら，2005）。
・作品、作文は前籍校で掲示（高宮ら，2005）。
・運動会などの行事での写真・ビデオ、クラス便りの依頼（高宮ら，2005）。
子ども同士の交流
・前籍校との交流の意図的な取り入れ（林，1998）。
・外泊時の前籍校での級友との交流（三木ら，2001）。
・前籍校の担任と友だちで見舞い訪問（櫻木ら，2009）。
・ICT を活用した交流活動（西牧，2010）。
・前籍校によるバーベキュー計画（阪中，2007）。
復学支援
・両校の関係者及び主治医とのカンファレンスの実施（石井，2008）。
・前籍校担任、特別支援コーディネーターとの支援会議の実施（荻庭，2009）。
・保護者・主治医・両校担任で病弱学級設置の話し合いの実施（阪中，2005）。
・両校担任による退院後の環境づくりのための話し合いの実施（清水ら，2000）。
ターミナル・ケア
・本児に希望を持たせることを目的とした小学校卒業に向けての連携（三木ら，2001）。

（２）家庭

院内学級担当教師と家庭との連携事例を分析したところ、「心理的支援」「子どもの情報交換」「学習面」「復学支援」「ターミナル・ケア」に分類することが出来た（表 2)。子どもの入院は、その家族にとっても大きな不安をもたらしていることが多いことが考えられる。そのため、家庭との連携の中に家族に対する心理的支援が必要だろう。

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

表 2　家庭との連携事例

心理的支援
・担任の「本人の心の安定と保護者の心の安定はつながっている」という考えによる密度の濃い連絡の実施（阪中，2005）。 ・母親に対する受容的な話の傾聴（阪中，2007）。
子どもの情報交換
・児童生徒の実態の把握を目的とした家族との密度の濃い連絡（阪中，2005）。 ・保護者と担任間での連絡や意見交換を目的とした連絡帳の活用（萩庭，2003）。 ・放課後等を使った保護者との直接面会（萩庭，2003）。 ・年 8 回開催されている親の会への参加（高宮ら，2005）。 ・入級時での学習者本人と保護者からの情報、院内学級における願い等を聞くことを目的とした面談の実施（山内ら，2009）。
学習面
・情報通信機器を活用しての病室から前籍校への授業参加の際の、保護者への趣旨説明や理解・協力依頼等の実施（石井，2008）。
復学支援
・時間がある時の保護者が職員室に訪問しての担任との相談（萩庭，2003）。
ターミナル・ケア
・本児死去後の前籍校担任と院内学級担任による家庭訪問の実施（三木ら，2001）。

（3）医療関係者

院内学級担当教師と医療関係者との連携事例を分析したところ、「入院中の子どもの情報交換」「病院内の行事」「授業への協力」「復学支援」「ターミナル・ケア」に分類することが出来た（表 3)。医療関係者とは子どもの治療に関する情報交換を行うことのみならず、子どもの社会経験の機会も医療関係者の協力が不可欠であり、前籍校等他機関との交流も主治医との連携がなければ実現することは困難であることが明らかとなった。

（4）教育委員会

院内学級担当教師と教育委員会との連携事例を分析したところ、「授業への協力」が挙げられた（表 4)。教室の設備改善等、教師一人で院内学級の授業環境をよりよくすることは困難である。子どもたちが通常学校と変わらない授業を受けることができるよう教育委員会とも連携を図っていることが明らかとなった。

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

表 3　医療関係者との連携事例

入院中の子ども達の情報交換
・担当医師からの子どもの容体や今後の見通し等の情報取得（山内ら，2009）。 ・月に一度の主治医・師長・看護師と担任による定期的な打ち合わせ会の実施（土屋ら，1995）。 ・医療スタッフのカンファレンスでのオブザーバーとしての参加（土屋ら，1995）。 ・病状、治療及び指導の方針について話し合うことを目的とした週に一度の「医師・看護師長・教師の会」の設定（林，1998）。 ・教師と看護スタッフ間での対象児ごとの連絡ノートの活用（清水ら，2000）。 ・週に一度学校から病棟ナースステーションに提出される「治療予定週案」（各主治医が病棟外の場所で児童生徒が学習や行事に参加できるか否か記入する）の活用（萩庭，2003）。 ・小児科・精神科児童思春期の専門医、担当の看護師、院内学級担任が参加する月に一度のケースカンファレンスの実施（阪中，2005）。 ・主治医や看護師との廊下での話し合いの実施（阪中，2007）。 ・スタッフ一同による評価会議の実施（中江ら，2001）。 ・小児病棟の多職種によるチーム医療カンファレンスの実施（高宮ら，2004）。 ・医師、心理士、薬剤師、管理栄養士も含めた日々のカンファレンスの実施（高宮ら，2004）。
病院内の行事
・入学式、始業式、終業式、文化祭、クリスマスコンサート、書初め大会、花火の夕べ等への医師、看護師の参加（林，1998）。 ・多くの医師、看護師の院内コンサートへの参加（阪中，2005）。
授業への協力
・授業での調理実習を計画した際の、医師からの条件付きでの参加許可（土屋ら，1995）。 ・総合的な学習の時間での、薬剤師・栄養管理士・検査部の先生・小児科医への外部講師依頼（森，2002）。 ・調理実習をする際の食堂やプレイルームの借用（萩庭，2003）。 ・学級への行き渋りがあった際の主治医や看護師による声掛け（阪中，2007）。 ・院内学級で実施の社会見学や遠足の際の医師や看護師等の引率（石井，2008）。 ・校外学習の際の非番の看護師 2 人による付き添い（櫻木ら，2009）。
復学支援
・高校受験の際の治療のサイクルの調整（萩庭，2003）。 ・保護者・主治医・看護師・ソーシャルワーカー等、関係者による支援会議の実施（荻庭，2009）。 ・医療チームの一員としてのチームへの参加（中江，2001）。
ターミナル・ケア
・病棟カンファレンスにおいて本人へのサポート体制、家族への支援などを医師、看護師（非番、時間外の看護師も参加）、院内保育士、院内学級教師らによる意見交換の実施。対応の確認（櫻木ら，2009）。 ・本児死後の病棟カンファレンス振り返りの実施（櫻木ら，2009）。

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

表 4　教育委員会との連携事例

授業への協力
・テレビ会議システムを活用した学習形態の工夫。委員会所属の ALT によるテレビ会議での授業の実施（石井，2008）。

（5）本校（院内学級が所属する学校）

院内学級担当教師と本校との連携事例を分析したところ、「子ども同士の交流」「授業への協力」「児童の報告」に分類することが出来た（表 5）。阪中（2007）は、医療と教育の連携を進めるうえでの留意点の一つとして、学校・病院管理職の連携をコーディネートすることを挙げている。院内学級の様子を報告する等、担任が学校長へ働きかけることによって本校の院内学級への理解も深まり、病院側とよりスムーズな連携が可能となるのではないだろうか。

表 5　本校との連携事例

子ども同士の交流
・本校との交流の意図的な取り入れ（林，1998）。
・野外炊飯への参加（阪中，2007）。
・本校での文化祭への作品展示とそれを鑑賞する「本校訪問」の実施（石井，2008）。
授業への協力
・担任以外の本校教員による教科ごとの訪問指導（阪中，2005）。
・総合的な学習の時間での本校の養護の先生への外部講師依頼（森，2002）。
・本校の教員の各教科の専門的な視点からの助言や既存教材の効果的活用（石井，2008）。
児童の報告
・本校の職員会議での院内学級の活動紹介（清水ら，2000）。
・学校長への院内学級の様子の報告（阪中，2007）。
・学校長の始業式や終業式への参加（阪中，2007）。
・行事で院内生が本校に行ったときの校長室での対応依頼（阪中，2007）。

（6）ボランティア

院内学級担当教師とボランティアとの連携事例を分析したところ、「病院内の行事」「授業への協力」「病院外の行事」に分類することが出来た（表 6）。病院には多くの人が協力して実施される行事もあり、院内学校担当教師は子どもに直接関係する医療関係者や保護者以外のボランティアスタッフなどとも連携を図っていることが明らかとなった。

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

表 6　ボランティアとの連携事例

病院内の行事
・院内コンサートにおいて自分で作った曲を披露することになった際のボランティアへの作曲や短歌指導依頼（阪中，2005）。 ・入院しているこどもと遊びや楽しい時間を共有する活動の提供（石井，2008）。 ・読み聞かせの実施。 ・パントマイマーの方のボランティア公演の開催（櫻木ら，2009）。
授業への協力
・ボランティアの学生を週 2 時間ゲストティーチャーに迎えてのコンピュータ学習の実施（森，2002）。
病院外の行事
・全国の院内学級に呼びかけて開催している「コンピュータによる全国院内学級絵画展覧会」の美術館での開催（森，2002）。

（7）院内学級教師

院内学級担当教師間の連携事例を分析したところ、「授業への協力」「子どもの情報交換」に分類することが出来た（表 7）。院内学級は複式学級で授業を行うことが多く、教師は自分の担当以外の子どもの情報を把握するための工夫を行っていることが明らかとなった。

表 7　院内学級教師間での連携事例

授業への協力
・本児と外出をする際の院内の低学年学級担任への同行依頼（櫻木ら，2009）。 ・授業中、隣にいる異なる教科の先生が飛び入りで参加するティーム・ティーチングの授業の実施（山内ら，2009）。
子どもの情報交換
・職員朝会での児童生徒についての情報交換（松野ら、1996）。 ・入級後の本児に対してどのように対応していくか等、院内学級教師同士の共通理解（山内ら，2009）。

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

Ⅳ. 考察

連携は文献の中でも様々な場面で様々な機関と図られており、カンファレンスの頻度や保護者との連携の方法等、内容は文献によって多種多様であった。これは、現在は確立されたガイドラインがないため、現場の教師は独自の判断で連携の方法を決めているためではないだろうか。子どもや保護者のニーズは一人ひとり違うが、共通のガイドラインがないまま支援を行うことは、教師自身が「これでいいのか」と悩み自分自身で抱え込んでしまう原因となる可能性もあるだろう。早急なガイドラインの確立が今後病弱教育の発展において必要とされるのではないだろうか。

また、本稿で対象とした文献でみられた院内学級担任と他職種との間で連携において最も多かったのが医療関係者との連携事例であった。その中でも連携が上手く図られていた事例から共通点を見つけ、連携を円滑に図るための留意点をまとめたところ、次の 2 点が挙げられた。

1 点目は、連携相手の仕事内容や考えをよく理解することである。清水ら（2000）の事例では、月に一度のペースで医師と院内学級担当教師が合同勉強会を開催し、毎回お互いの立場から考えた子どもとの関わり方について話し合いを行った結果、お互いの考え方を理解・尊重し、医師から院内学級教師に連携協力を働きかけることがあった。このように、相手の考えを受け止め、理解することで今までとは違った視点から子どもを捉えることができ、子どもたちにとっての必要な支援について広い視野で考えることができるようになるのではないだろうか。

2 点目は、普段から交流を深めることである。文献の中でも医教カンファレンスを行っている事例は多くみられたが、連携はその場だけで図られるものではない。毎週決められた時に顔を合わせ決められた内容に沿って話をする固定化された話し合いでは、本来はお互いに共有すべき内容であるものを逃してしまう可能性もある。連携をする者同士で普段からコミュニケーションをとり、連携の必要性を感じることのできる取り組みを行うことができるよう工夫すべきである。

以上､院内学級教師と他職種との連携の在り方について整理してきた｡入院する子どもは、学校から離れること、苦しい治療、食物の制限、薬の服薬等、入院前とは異なった生活を送ることを強いられている。そのような子どもの生活を可能な限り入院以前の生活に近付けるためには、他職種との連携が必要不可欠である。今後は、院内学級担当教師が様々な関係機関をつなぐコーディネーター的役割を果たすことが重要となるだろう。

文献

1） 萩庭圭子・石崎千富（2003）養護学校における子どもたちの QOL を考えよう！，小児看護，26，8，1031-1038

2） 萩庭圭子（2009）疾患をもって通学する子どもの支援―特別支援学校（病弱教育）の取り組み―，小児看護，32，1，76-82

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

3) 林恵（1998）病気療養児の教育—院内学級と養護学校との連携—, 特殊教育, 93, 24-27
4) 石井力（2008）院内学級における教育を支える関係諸機関との連携—大阪市立都島中学校　大阪市立総合医療センター院内学級の取組—，特別支援教育，30，32-35
5) 松野圭介・河野曜子（1996）特色ある病院内学級の経営—小学校・中学校の連携を密にした教育活動—，特殊教育，84
6) 三木芳美・山口悦子・倭和美・宮田雄祐（2001）卒業を控えたターミナル期児童の居住地校との連携のあり方について，小児看護，38，4，533-537
7) 文部科学省（1953）学校教育法施行令第 22 条の 3
8) 文部科学省（1994）病気療養児の教育について（文部省初等中等教育局長通知）
9) 文部科学省（2011a）学校教育法第 81 条第 2 項
10) 文部科学省（2011a）学校教育法第 81 条第 3 項
11) 森訓子（2002）院内学級における生きる力を育む心理的支援のあり方—病院・大学と連携を図りながら全国展開へ—，山陽放送学術文化財団リポート，46，49-54
12) 村上由則（2004）病弱教育，鈴木陽子・井坂行男・東風安生（編著），特別支援教育の扉，八千代出版，65-81
13) 中江陽一郎・熊谷公明・栗原まな（2001）神奈川リハビリテーション病院での院内学級活動，小児保健研究，60，1，41-45
14) 中村章子・真城知己（1999）医療ソーシャルワーカーの教育領域での機能の可能性，日本特殊教育学会台 37 回大会発表論文集，66
15) 西牧謙吾（2010）病気のある子どもの教育の充実を目指した ICT 活用について，電子情報通信学会技術研究報告. ET，教育工学 110，209，5-9
16) 阪中順子（2005）カウンセリングをいかした院内学級の取り組み，奈良県立医科大学研究紀要 56，4，175-181
17) 阪中順子（2007）「院内学級」の役割と課題および医教連携の留意点，小児看護，30，8，1144-1149
18) 櫻木里子・永尾紀代美（2009）終末期にある子どもの院内学級における教育支援，小児看護，32，2，237-245
19) 清水章子・三輪由香・渡辺みづほ・寺本貴英・井上恭子・田村純子・和仁雅樹（2000）大学病院小児科における院内学級との連携の治療的意義について，小児の精神と神経，40，1，26-34
20) 高宮静男・松原康策・川本朋・白川敬子・井戸りか・笹井恵子・月岡万里子・米永千香・奥野昌宏・細見光一・奥村朋子・松本美穂・高原夕紀子・山本欣哉・佐藤倫明・馬場国蔵（2004）小児がん患児と家族に対する多角的な心理・社会的援助　心身医，44，1，52-59
21) 谷口明子（2003）教育の場としての病院内学級の特徴 ： 実践へのエスノグラフィック・アプローチ，東京大学大学院教育学研究科紀要，43，155-164
22) 谷口明子（2011）病弱教育における教育実践上の困難—病院内教育担当教師たちが抱える困り感の記述的報告—　教育実践研究 16
23) 土屋志伊・市川博敬（1995）病弱教育の実際—医療と教育の連携について—，特殊教

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

育，81
24） 山内章正・益子典文（2009）院内学級の現状と中学校数学授業における教師の指導方略に関する研究—学習者特性に基づく授業の指導方略のモデル化—，岐阜大学カリキュラム開発研究，27，1，26-36
25） 山内章正・益子典文（2009）院内学級中学数学授業記録の事例分析に基づく教師の指導方略決定のモデル化—教師の指導過程分析に基づく「多重的指導方略決定モデル」—岐阜大学カリキュラム開発研究，27，1，37-53

Received
September 19,2012

Accepted
October 17,2012

Published
October 31,2012

Asian Journal of Human Services
VOL.3 October 2012

CONTENTS

REVIEW ARTICLES

How Did 'Difficult to Involve' Parents Emerge in Early Childhood Care and Education?
-A Discussion of Research Trends on Family Support and Relationship with Guardians.....Tetsuji KAMIYA・1

The Review of the Studies on the Fall Prevention Exercise Programs for Elderly Persons.....Jaejong BYUN・16

Current issues in driver's license of people with intellectual disabilities.....Atsushi TANAKA・32

ORIGINAL ARTICLES

The Changing Characteristics of In-home Care Service Providers in the U.S. and in the UK: Implications for South Korea .....Yongdeug KIM,et al.・38

Assessing Training System for Social Service Workers in South Korea: Issues and Policy Agenda .....Jaewon LEE,et al.・60

Relationship between depression and anger .....Noriko MITSUHASHI,et al.・77

Workaholism Determinant Variables of Social Workers and Care Workers in Senior Welfare Centers in Korea .....Jungdon KWON,et al.・87

The Exploration of Financial Resources of Financial Adjustment System and Social Welfare in Japan .....Haejin KWON,et al.・105

Relation between the importance of school education and after-school activity programs and age, sex, and school type for school-aged children with disabilities.....Hideyuki OKUZUMI,et al.・131

A Study on the Vitalization of Silver Industry by Analyzing the Needs of Silver Industry in the Daejeon, South Korea .....Gowhan JIN・138

A Comparative study on Factor Analysis of the Disabled Employment between Japan and Korea .....Moonjung KIM,et al.・153

Relationship between Teacher Mental Health that Involved in Special Needs Education and Sence of Coherence .....Kohei MORI,et al.・167

SHORT PAPERS

The Analysis of Disaster Mitigation System and Research on Disaster Rehabilitation. .....Keiko KITAGAWA,et al.・177

The Trend of International Research on University Learning Outcome and Quality of Life and Mental Health of University Students
. .....Changwan HAN,et al.・189

The research trend and issue of hospital school in the education for the health impaired
.....Aiko KOHARA,et al.・198

Bibliographical consideration about the current situation and the problem to be solved about cooperation between teachers in hospital classrooms and other staffs.....Remi KAKUTANI,et al.・208

The Current Status and Issues in Korean Barrier-Free General School
.....Eunae LEE,et al.・219

CASE REPORT

Approach for the problematic behaviors of autism complicated with severe and multiple disabilities
~ a case study of a first year junior high school student in daily living ~
. .....Kazumi SUGIO,et al.・229

Published by
Asian Society of Human Services
8-24-25 Shinmachi, Ome, Tokyo, Japan